

## 地域と連携した幼児を対象とする造形ワークショップの実践報告

### Activity Report of Plastic Arts Workshop for Kids in Collaboration with Regional Communities

菅澤 薫

#### 要 約

本稿は、静岡県掛川市の「第 20 回 掛川ひかりのオブジェ展」の関連企画である幼児向け造形ワークショップの実践報告である。ワークショップは、大きな有孔ベニヤ板に水性ペンキを使って自由に絵具遊びを楽しむ内容で、道具として霧吹きやビー玉、割りばし、ストローなどを使用した。参加者は 2 歳児から 4 歳児の異年齢混合で、保護者も同伴して参加した。

導入時にはカラーセロハンで作成した 3 原色のかえるたちを使って、色の混ざり合いについて子どもたちに興味づけをした。活動中は、子どもたちが道具に触発され、自発的にアイデアを出し合いながら楽しむ姿が見られた。

課題としては、初対面同士での参加者が多かったことから家族単位での製作活動に留まってしまったため、子どもたち同士の交流を促す工夫が必要であったことが挙げられる。

**キーワード：幼児造形、ワークショップ、地域、実践報告**

#### 1. はじめに

本稿は、静岡県掛川市で年に 1 回行われる「第 20 回 掛川ひかりのオブジェ展」の関連企画である幼児向け造形ワークショップでの取り組みについて取り上げる。この「掛川ひかりのオブジェ展」は、掛川ひかりのオブジェ展実行委員会が主催するもので、「掛川駅から掛川城までの駅前通りをギャラリーとして、市民・企業・生徒学生・地元商店街等による『手作りのひかりの造形』で彩り、まちのあたたかさを演出するイベント」<sup>1)</sup> である。このイベントには、「さまざまなかたちで市民が関わることで、まちにみんなの気持ちを集めよう、市民一人ひとりが、まちに『居場所』を見つけ、もっと掛川を好きになってもらおう」<sup>2)</sup> という願いがこめられている。

共催には、かけがわ街づくり株式会社・駅通り名店会・掛川おかみさん会、協力には、中町商店街振興組合・連雀商店街振興組合、

後援には、掛川市・掛川教育委員会・掛川観光協会・掛川商工会議所がついており、地域一体となって作り上げているイベントであることがわかる。

毎年、秋頃に光を使ったオブジェ作品を募り、冬には街中で展示される。出展者は小学生から大人まで、さまざまな年代の人が参加している。

「掛川ひかりのオブジェ展」の関連企画として、夏に「夏休み親子工作教室」というイベントを開催し、5 歳児（年長）から小学生とその保護者を対象に絵画製作を行い、そこで製作した作品を冬の掛川ひかりのオブジェ展に出展していた。

具体的には、有孔ベニヤ板の上に個別に水性ペンキで絵を描き、板の裏から有孔部分に LED ライトを設置し、ライトアップするものであった。このイベントは、東京学芸大学の学生が主体となって活動していた。この「夏

休み親子工作教室」に、新たな試みとして幼児コース（2歳児から4歳児）を2019年に設立することになり、筆者が講師を務めることになった。

工作教室の時間と対象年齢については【表1】の通りである。午前の幼児コースは筆者が指導にあたり、午後の親子コース、おとなコースは東京学芸大学の鉄矢悦朗教授と研究室の学生たちが指導にあたる。本稿では、幼児コースのみについて触れていく。

表1 夏休み親子教室の時間と対象年齢(筆者作成)

コース	時間	対象年齢
幼児コース	10:30~11:30	2歳児から4歳児
親子コース	13:00~15:30	5歳児から小学生まで
おとなコース	13:00~15:30	一般(中学生以上)

## 2. ワークショップの打ち合わせと教材研究

事前打ち合わせは合計2回行われた。まず1回目では、新しい企画のため、掛川ひかりのオブジェ展実行委員会のメンバーとおおまかな打ち合わせを行った。本ワークショップは夏に行う単発のものではなく、12月にはLEDライトを有孔ベニヤ板の後ろから光らせて、街中(屋外)に1か月半ほど展示することが前提となっている。したがって、耐久性のある作品が必要となる。特に掛川は強風の日が多い地域であることも配慮しなければならない。

これまでの5歳児から小学生を対象とした「夏休み親子工作教室」では、1人1枚の正方形のベニヤ板に絵具で絵を描いていた。幼児コースは定員10人と少人数であることや掛川ひかりのオブジェ展実行委員会の「家庭では取り組みにくい大きな絵画に取り組んでみてはどうか」という意見のもと、共同製作で大きな作品(1800×450mmを2枚並べた有孔ベニヤ)に取り組むことになった。具体的には、上記のベニヤ板を4組の親子で使用す

る。その際に、筆で描くのではなく、幼児教育でよく使用される、霧吹き、たんぼ、ビー玉、ローラーなど様々な道具を用いて絵を描くことになった。道具を使用せず、手や足を使って描くことも可にした。

絵具として使用するのは水性ペンキである。最初は幼児が口に入れても安全なよう食紅を使った小麦粉粘土を検討したが、夏に製作したものを冬の時期に屋外に展示することを考えたときに保存性と耐久性の観点から、腐らずに雨に濡れても問題のない水性ペンキを使用することになった。皮膚が弱い子どもへの配慮として、手足で描くことを控え、筆やたんぼなどの道具を使用することを事前に保護者へアナウンスした。

2回目の打ち合わせでは、掛川ひかりのオブジェ展実行委員会のメンバーと教材研究を行った。まず使用する水性ペンキが実際に皮膚に付着しても問題ないか検証してみた。大人だけではなく、子どもの皮膚でも大丈夫かメンバーの子どもにも事前に試しに使用してもらった。その結果、問題がなかったことが確認できた。

次に実際に使う有孔ベニヤ板の上に霧吹き、たんぼ、ビー玉、ローラー、割りばし、ストローを用いて水性ペンキで試し描きをした。たんぼは割りばしにスポンジを丸めて輪ゴムで括りつけたもので、幼児にとって筆よりも扱いやすい道具になる。ビー玉は、水性ペンキをつけて転がすことによってできる絵具の痕跡を楽しむものになる。2歳児が誤飲しないように目を離さないようにする必要がある。割りばしは塗った水性ペンキを引っ掻いて下地がみえるスクラッチ技法を行うように、ストローは水性ペンキを息で飛ばす土リッピングの技法を行うように用意した。霧吹きを使用する場合は通常よりも多めの水で水性ペンキを溶かしないと上手く絵具が噴出されないことがわかった。

色を混色することによって、さまざまな色

が出来上がる様子を子どもたちに感じ取ってもらいたいと思い、用意するペンキの数は3原色（赤・黄・青）に決定した。

### 3. 活動の概要

実施日：2019年8月11日

題材名：「夏休み親子工作教室」

指導時間：10:30～11:00（60分）

対象と人数：2歳児2名、3歳児3名、4歳児8名（計13名、保護者同伴）

場所：西南郷地域生涯学習センター（掛川市）

指導者：筆者

補助者：掛川ひかりのオブジェ展実行委員会、東京学芸大学の学生8名、地域の高校生6名

題材のねらい：色と色の混ざり合いや絵具の痕跡を味わいながら、みんなで大きな絵を作り上げることを楽しむ

活動の内容：大きな有孔ベニヤ板をみんなで囲い、さまざまな道具を使って絵具遊びをする

材料：有孔ベニヤ板、霧吹き（化粧水のスプレー）、たんぼ、ビー玉、ローラー、水性ペンキ（赤・青・黄）、バケツ、紙コップ、クレヨン、バット、割りばし、ストロー、絵具入れ

異年齢混合（2歳児、3歳児、4歳児）で、60分の活動を行った。親子での参加企画のため、子どもには必ず保護者が同伴している。筆者が導入・進行を行い、掛川ひかりのオブジェ展実行委員会と東京学芸大学の学生、地域の高校生が補助者として援助にあたった。

## 4. 活動内容

### 4-1. 事前準備・環境構成

床を汚さないため、床全体にブルーシート

を敷いた。また有孔ベニヤ板の穴から絵具が垂れることを防ぐため有孔ベニヤ板の裏に新聞紙を敷いた。

有孔ベニヤ板は縦一列に配置し、普段の家庭や園では見ることのない細長い構成にすることにより、子どもたちが見たときにわくわくするように演出した【図1】。

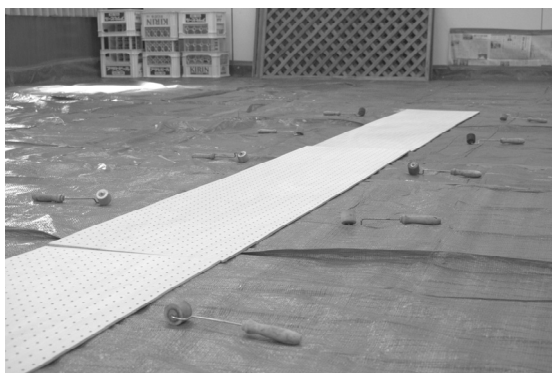


図1 支持体の有孔ベニヤ板

### 4-2. 導入時の工夫・配慮

導入では、白衣を着た筆者がかえる博士（筆者の名前“かおる”を一文字変え“かえる”にしたもの）として登場し、カラーセロハンで製作した赤いかえる、青いかえる、黄色いかえる【図2】を使って次のような歌を歌った。



図2 導入に使用したカラーセロハンで作成したかえる

「黄色がえるがやってきた、ケロツケロツケロー。青がえるは眠そうだ、ケロツケロツケロー。（作詞作曲：筆者）」

歌い終えたら、「青がえるさん起きてー」

と筆者がかえるに話しかけて起こす動作をした。次に黄色がえると青がえりが子どもたちに「こんにちはー」と挨拶をする。この行為によって、子どもたちを鑑賞者から参加者に変化させるねらいがある。話の中で、青がえると黄色がえりを重ねると何色になるか子どもたちに訊ね、色を想像して答えてもらった。意見がひとしきり出たら、答えを筆者から述べるのではなく、重ねたカラーセロハンを実際に覗いてもらうことにより、色と色が重なり合うと異なる色に変化することを子どもたち自身で確認してもらった【図 3】。

「緑色になるの不思議だねー」と声掛けをし、「実は赤いかえるさんもいるんだ。今日は、このカエルさんたちと同じ色の絵具を使ってお絵描きしよう」と赤、青、黄の絵具を子どもたちに見せ、絵具の話に入る。たんぽに絵具をつけて、練習用の大きなベニヤ板に点々の絵具の跡や線をひいてみせた後に、今日は特別に手を使って描いてもよいことを実演してみせた【図 4】。それを終えた後、子どもたちに後ろを振り返ってもらい、大きな板が縦長に並んでいる様子を見てもらってから、あの板に描いていくことを伝えた。



左：図 3 カラーセロハンを覗いている様子  
右：図 4 導入風景

#### 4-3. 活動の展開と作品の鑑賞方法

保護者と子どもでペアになってもらい、道具があるところにそれぞれ移動した。

最初から絵具を配置しておくのではなく、何もつけていない状態のローラーでころころ

する動作をしてもらった後に絵具を出した。最初からすべての道具を配置していても選びきれないだろうから、ローラー・たんぽ、ビー玉・スプレー、割りばしの順に小出しに道具を出した。製作終了後は、自分が描いた場所にクレパスで自分の名前を書いてもらった。

鑑賞方法は、「探検しにいこう」と声かけをし、作品【図 5】の外側をぐるぐると回りながら、他の参加者の作品を鑑賞した。歩くだけではなく、地べたに寝転んで低い位置からも鑑賞を行なった。

最後は、夏休み親子工作教室では恒例である、保護者から子どもたちへ表彰状を渡し、イベントを締めくくった。

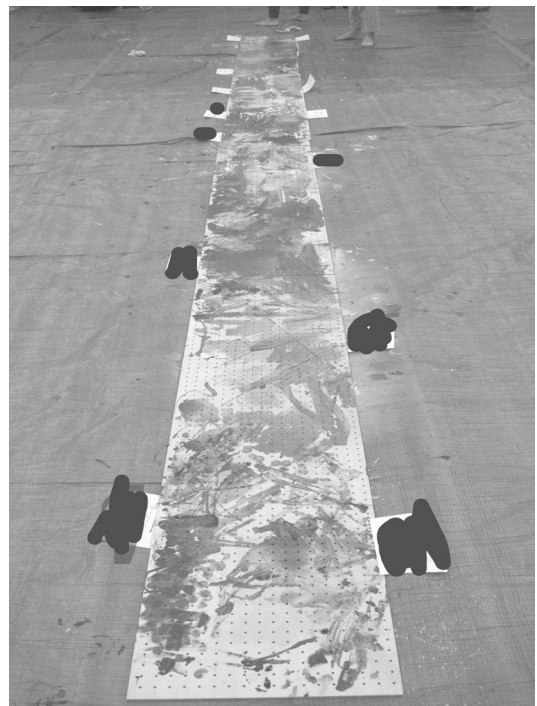


図 5 完成した作品

#### 5. 考 察

導入でベニヤ板に実際に絵具を使って実演した時、青色と黄色の絵具が交わった部分が緑色になった瞬間、「緑のかえるさんだ——！」と興奮して叫んでくれた子どもがいた。絵具の実演に入る前のカラーセロハンのかえるたちの活動と結びついた瞬間だった。もしかす



ると、かえるの話から絵具の話に移った後も、色をかえるに見立てて想像して一続きで見えてくれたのかもしれない。

製作活動としては、大きな板に描くことにより身体全体を使ったダイナミックな絵具の痕跡などを期待していたが、参加者同士が初対面なこともあり、隣に遠慮しながら自分のスペースからはみ出さないように気を遣っている様子が多々みられた。最初の導入時に板いっぱい描いてよいと説明するだけでなく、ウォーミングアップも兼ねて、みんなで一斉に走りながら描くなど他の参加者と交流を取りながら大きく動く活動があった方が良かったと考えられる。

活動中は、手のひらで絵具を混ぜてから画面に塗る様子や、スプレーを使う際に手の上からかけて手形を残す【図 6】など、子どもたちが提案した遊びが見られた。特にスプレーで手形をとる遊びは、近くにいた他の参加者も真似て遊ぶなど、他者のアイデアに触発されて活動が広がっていく様子が垣間見れた。このように筆者たちは、道具の使い方の一例を示しただけで、そこから子どもたちが自発的にアイデアを出し、遊びを楽しむ姿勢が見受けられた。特に、手で絵具を触れさせることによって色が混ざる様子に興奮し、緑色のかえるができた瞬間に喜びを表現する子どもの様子が印象的であった。

ビー玉は絵具をつけて転がすように用意したものだったが、上層部の絵具をビー玉でひっかいて下層部の絵具を露出させるスクラ



図 6 スプレーを使って手形を取っている様子

ッチ技法を自身でみつめていく姿もみられた【図 7】。またビー玉をただ転がすだけではなく、星の形を意図的に描きだしている子どももいた【図 8】。

活動後の作品の鑑賞では、子どもたちは興味津々で他の参加者の作品を見て回っていた。地べたに寝そべるなど、慣れない体勢で鑑賞することによって、新たな視点から作品を楽しむことができているように思う。



図 7 ビー玉でスクラッチ技法を行っている様子



図 8 ビー玉で星を描いている様子

## 6. まとめ

今回のイベントでは、参加者のほとんどが初対面同士であり、家族単位での製作活動に留まってしまった印象がある。大きな絵をみんなで作ることをねらいの1つとしていたが、もう少し他の参加者との協力や刺激を通じてお互いの製作活動を広げることができれば良かったと感じた。

実際の活動では、子どもたちが自ら道具を選びながら絵具遊びを楽しんでいる様子が見受けられた。本ワークショップは子どもたちが自発的にアイデアを出し、自由に絵具遊びを楽しむことができる場となり、想像力や創造力を育む良い機会となった。さらに、親子間での交流の場になり、保護者は子どもの新たな一面を垣間見ることができた。

このように、掛川ひかりのオブジェ展「夏休み親子工作教室」での幼児向けワークショップは地域の協力によって成功し、子どもたちの創造性や交流を促進する有益なイベントとなったことが示された。今後行う場合は、地域のイベントのため、産物や歴史などを絡めるなど、地域を意識させるものを取り入れてもよいかもしれない。

#### 引用／参考文献

参考ウェブサイト

1) 「掛川ひかりのオブジェ展」

<https://hikarinoobjet.jimdofree.com/>

(閲覧日 2023 年 12 月 12 日) より引用。

2) 同上。

#### 図版典拠

図 1、2 筆者撮影

図 3、4 掛川ひかりのオブジェ展実行委員会撮影

図 5 筆者撮影

図 6～7 鈇矢悦朗氏撮影

#### 謝 辞

今回、親子工作教室の機会を与えていただきました掛川ひかりのオブジェ展実行委員会の皆様、ご協力くださいました東京学芸大学の鈇矢悦朗氏と研究室の学生の皆様には感謝の意を表します。